Church of the 26 Japanese Martyrs

通巻 No.254　2024年12月29日

クリスマス・新年号

教会報ほんじょ

〒130-0011　東京都墨田区石原 4-37-2
TEL：03-3623-6753　FAX：03-5610-1732
https://www.catholic-honjyo-church.org

INDEX

□「聖年にあたって」
主任司祭　パウロ 豊島 治
□「司牧評議会からのお知らせ」
□ その他
□「主の降誕の祭日」

「聖年にあたって」

主任司祭　パウロ 豊島 治

ご降誕のお祝いと新年のご挨拶を申し上げます。

本所教会の降誕祭、二十四日の夜は聖堂の補助いすが埋まるほどの人数で祝われました。ミサ十五分前には前庭にあるご生誕の人形にイエス様を据える式を子どもたちと一緒に礼拝し、夜半のミサが始まる流れでした。二十五日の日中のミサでは夜半より多い国外からの旅行者で満たされ、実際のご降誕の場面通り、訪問者を交えての祝いとなりました。国外の方が教会を訪れた場合、三年前の三月発表の東京大司教司牧指針「多国籍の人々がつくる豊かな教会共同体を目指して」もあり、指針をできる範囲で工夫して行っている最中です。国外からの訪問者らしき通りすがりの方が三ツ目通り沿いのマリアさまに敬愛の祈りをささげ、前庭の降誕の人形にかがんで黙想されている姿も見受けられました。

「国外から日本に来られる方は神さまからの贈りものです」と六年前おっしゃった東京大司教は十二月初旬、枢機卿に叙任されました。ネットニュース「バチカンニュース英語サイト」のクリスマスメッセージは菊地枢機卿によるメッセージでした。

教皇様はクリスマスミサを行い、聖年２０２５がはじまりました。通常聖年というものですので四半世紀ごとの開催となります。日本人の平均寿命は男性八十一歳、女性八十七歳だそうで、そこから計算すると聖年を経験するのは人生で三回ないし四回。**大事に**しなくてはいけません。免償など信仰者としての振り返りも記載されていますが、今回の勅書にかかれているモットーは**「希望は欺かない」**というものです。俯瞰してみれば私たちの普段の気持ちはどちらかというと希望は程遠いものです。一番の要因は私たちが神から与えられている『いのちの尊厳』がないがしろにされている現状、戦闘・排除など様々な形でいのちが危機にさらされている闇があります。暗闇が増すほど小さな光が大きく照らされます。教会は「光」となる存在として、たとえ小さくてもすすんで希望の光を放つ存在です。いのちの尊厳をかかげて歩んでいく一年でありますように。

昨年十月に世界の代表者が一同に集まった話合い（シノドス）が終わり、そこで決めたことを実行するようにと教皇さまは署名されました。さらに実行したことを振り返り、その報告を聖座にするようにとの堅い決意を示されました。その署名された文書の日本語訳が待たれるところですが、本所教会地区単位で先んじて「霊による会話」をはじめているところです。一緒になって祈り、そのうえで語り、これから先をこの識別をもって進んでいくことです。要ごとの決定は従来のシステム通り主任司祭がすることには変わりないとされていますが、その共同識別からは大きく離れることはないでしょう。

今日、教会内の常識となっている伝統的な考え方は、世間の常識的な考え方として通用しなくなってきています。社会のなかで、わたしたちがどう責任を果たすかを考えなければならない時がきました。そこで、一つの指針となるのがさきほどのシノドス的（ともに歩む）指針です。世界、日本、東京すべてに亘る指針が昨年与えられたのです。

同時期に一年間にもわたって本所教会のこれからを考えてくださった担当の皆さんはコロナ下からの教会の在り方を進めるために「暫定ガイドライン」なるものを評議会に提出されました。カトリック教会の姿は時代とともに光となるので普遍ですが、これから先も道標なき道ではなく希望に向かう年になることは先月からの出来事で証されました。意向通りの一年となりますように。